



〔学会〕 第1477回 千葉医学会例会 第47回 千葉泌尿器科同門会学術集会

日 時：2023年1月28日（土） 12：30～

場 所：ペリエホール「Room A」（ペリエ千葉7階・千葉駅ビル）

1. 当院におけるPDD-TURBTと白色光のみのTURBTの臨床的検討

岡 龍司（千大）

当院で施行した5-ALA投与下でのPDD-TURBTについて、白色光のみのTURBTと比較し、その有用性を検討した。PDD下での平坦組織の生検は極めて高い陰性的中率を認めたことから、不要なランダム生検の削減につながりうる。また、PDDを用いることで、短期的な再発率の低下に寄与する可能性が示唆された。

2. 転移を有するホルモン感受性前立腺癌に対しドセタキセルとアンドロゲン除去併用療法が著効した1例

田中慧樹（千大）

【症例】53歳男性。前立腺生検にてiPSA1723ng/mL, Gleason Score 4+5, cT3aN1M1cとなる。DTXの3週毎の投与、ADTの投与を計画した。X年2月よりDTX投与を開始し、6コースのDTX投与を完遂した。画像検査では原発巣、転移巣共に著明な縮小を得た。【考察】high volume mHSPCに対しDTX+ADTの upfront 治療が著効し、治療の有用性が示唆された貴重な症例であったと考えられる。

3. BRCA陽性転移性去勢抵抗性前立腺癌に対してオラパリブを使用した1例

福井雄大（JCHO船橋中央）

症例は73歳男性。PSA6846ng/mlで受診し、各種検査の結果cT3N1M1abcであった。ビカルタミド使用後6か月でPSA上昇しCRPCとなった。膀胱癌と卵巣癌の家族歴があったため、BRCA Analysis 施行しBRCA2変異確認。オラパリブを使用した。投与開始12か月後に貧血の副作用が出現し減量したが改善見られず治療変更となった。BRCA 遺伝子変異の検出は去勢抵抗性前立腺癌の10%以下とされているが、今回は特徴的な家族歴の聴取により検査・診断に至った症例を報告する。

4. 間質性膀胱炎においてジムソ®膀胱内注入液50%は最低何回注入すれば有意な治療効果を得られるのか？

加賀勘家（千葉県立佐原）、鎌迫智彦（済生会宇都宮）、加賀麻祐子（みはま成田クリニック）、布施美樹（横浜労災）、山西友典（宇都宮脳脊髄センター・シンフォニー）

【目的】間質性膀胱炎においてジムソ®を最低何回膀胱内注入できれば有意な治療効果が得られるのか後ろ向きに評価した。【方法】間質性膀胱炎患者を対象に、VAS, ICSI, ICPIなどを治療前中後に評価した。【結果】VAS, ICSI, ICPIは順に、膀胱内注入回数1回、2回、2回で有意な減少を認めた。【結論】ジムソ®の膀胱内注入療法は1-2回の注入で疼痛、2-3回の注入で下部尿路症状が有意に改善していた。

5. 当院におけるmHSPCの予後・予後因子の検討

加藤洋人（帝京大ちば総合医療センター）

【目的・方法】mHSPCの予後因子の同定を目的とした。2007年～2022年6月まで、当院において治療されたmHSPC 244例を後ろ視的に解析した。【結果】OS・PFSともに高LDH血症、遠隔リンパ節転移ありが予後不良因子であった。無増悪生存期間（PFS=TTCR=time to CRPC）を層別化したところ、

TTCR延長した群がOS延長を示した。【結論】高LDH血症、遠隔リンパ節転移ありが、予後不良な因子である可能性が示唆された。

6. 尿路閉塞による感染と腎障害を繰り返したが腹腔鏡下開窓術が著効した parapelvic cyst の1例

黒川幸一郎、布施美樹、桂 蒼汰、丸尾匡史、橋本 湧、菅原 翔、宮崎兼考、井上 淳、永田真樹（横浜労災）

【症例】74歳女性。無尿を主訴に前医を受診し、Cre11.45mg/dlと腎機能障害を認めた。単純CTで右傍腎盂嚢胞と右水腎症を認め、これによる腎後性腎不全と診断した。ステント留置による保存加療後に腹腔鏡下腎嚢胞開窓術を施行し、以降再発なく経過している。【考察】嚢胞開窓術は近年再発率が低く、低侵襲であることから腹腔鏡手術が主流である。合併症として尿瘻が挙げられるが、術中のインジゴカルミン注入により予防できる可能性がある。

7. 生下直後に腎瘻造設を要した新生児巨大水腎症の1例

立脇大輔、松野大輔、本間澄恵（千葉県こども）

症例は0歳男児。在胎28週より胎児エコーで右腎盂拡張あり。39週で経陰分娩にて出生。日齢1に腹満増強と嘔吐を認め、エコーで正中を越えるSFU Gr.4の右巨大水腎を認めた。日齢2で臓器圧排による哺乳・呼吸障害と判断され、緊急で右腎瘻造設術が施行された。日齢16で右腎盂形成術が施行され、現在は腎機能低下なく経過している。出生直後の先天性水腎症において腎瘻造設はCreやGFRではなく、電解質や臨床的症候で適応が決まる。

8. 巨大腎癌に対し化学療法の後、腎摘除術を施行した2例

山村剛平（千葉労災）

巨大腎癌であり根治切除困難と考え化学療法を施行した後腎摘除術を行った2例を若干の文献的考察を加えて報告する。1例目は56歳男性。16.0cm×13.0cmのみぎ腎腫瘍。切除困難と考え、化学療法施行後に腎摘除を施行した。2例目は69歳女性。12.4cm×9.3cmのみぎ腎腫瘍。所属リンパ節転移と転移を認めIMDCリスクは5点で高リスク。切除困難と考え、化学療法施行後に腎摘除術を施行した。

9. 僕が経験した陰茎症例の2例

渡部良一（東京新宿メディカルセンター）

転移性陰茎癌がTKIにより奏功がみられた1例。症例78歳、男性。陰茎腫瘍で当科紹介され、胸部～骨盤部造影CTで左上肺野に腫瘍を認めた。肺、陰茎腫瘍の生検とともに腺癌が示唆され、肺原発の転移性陰茎癌と診断。MET ex14 skipping 変異を認め、TKIの適応となる。一時的に奏功するも、病勢は進行し、受診4か月後に死亡。5年前からの尿道結石の1例。症例56歳、男性。舟状窩尿道結石をリソクラストで碎石。

10. 当院のRAPNにおけるearly unclampingの臨床的意義の検討

森川真衣 (千大)

【背景と目的】 ロボット支援腎部分切除術 (RAPN) におけるearly unclamping EU) により温阻血時間 (WIT) が短縮できるが、その臨床的意義の検討は不十分である。EU導入による周術期成績の変化を明らかにするため臨床的検討を行った。【対象と方法】 対象は千葉大学医学部附属病院にて2017年4月~2022年3月に腎実質縫合を要するRAPNを施行した167例。手術所見、手術前後の血液検査所見、並びに周術期合併症について後方視的に解析を行い、統計解析にはJMP pro 16を用いた。【結果】 EU群は47例、conventional clamping (CC) 群は120例であった。EU群とCC群を比較したところ (EU vs. CC)、WITは有意にEU群で短く (18分 vs. 22分, $p=0.006$)、console時間に有意差は認めなかった (124分 vs. 105分, $p=0.21$)。術後Hb低下率の比較では、POD1においてEU群が大きい傾向にあったが (-12.5% vs. -9.3%, $p=0.065$)、POM1においてEU群が有意に小さかった (-4.8% vs. -7.3%, $p=0.024$)。術後eGFR変化率の比較では、POD1においてEU群が小さい傾向にあり (-17.6% vs. -27.5%, $p=0.28$)、POM1ではEU群が有意に小さかった (-13.9% vs. -17.7%, $p=0.037$)。【考察】 EU導入により、腎機能温存と術後貧血の軽減において周術期成績が改善される可能性が示唆された。

11. 当院におけるPNL導入と初期治療成績について

村上裕樹 (松戸市立総合医療センター)

松戸市立総合医療センターでは2020年5月より経皮的腎結石碎石術 (PNL) を開始し25症例を経験した。今回当院でのPNLの導入と初期治療成績について報告する。当院では初回手術での完砕率は64%でありstone free rateは96%と諸家の報告と同等であった。リソクラスマスターJやLITHOPUMP等の機器を使用することにより効率的な碎石が可能となった。

12. 亀田IVFクリニックで診断された精索静脈瘤の治療成績 柴田裕貴 (千大), 小宮 顕 (亀田総合), 川井清考 (亀田IVFクリニック幕張)

顕微鏡下精索静脈瘤手術を施行し1年以上経過確認できた90例について調査し、精液所見の変化、妊娠出産予後等について検証した。精子濃度や総運動精子数は術前から術後3か月で、それぞれ有意に改善した ($p<0.05$)。生児獲得率は1年以内で32.2% (29/90)、2022年7月時点まで56.7% (51/90) だった。生児獲得の有無に分けて比較したところ、術前精子濃度で有意差を認め ($p<0.05$)、生児獲得の予後予測因子として期待が持てる結果となった。